

○これは昨年1月28・29・30日、原ノ町駅前の南相馬市中央図書館で開催の「漫画展」に入場された木村栄子さんが、満州国での戦争体験を詳細で克明に原稿用紙70枚に書かれたものの一部です。○膨大な記録なので3号に分けて編集しました。○木村さんは「漫画展」の絵にご自分の体験を重ね合わせ、特に入植者を見捨てた当時の日本国や日本政府の無責任さや非情さ、いち早く逃亡した関東軍や、当時の指導者の不正に対し、怒りを持って話されていました。○そして1945(昭和20)年8月、終戦時の満州国消滅の様子は、昨年のも原発事故で巧妙なのか稚拙なのか、国民を見捨てたような現在の「国・政府」の政策とよく似た状況になっています。

子供たちに優しくした父
昭和十九年の八月頃、私と父と美
美子の三人は、馬車で連江口の松花
江埠頭の市場に行き、合作社（農協）
に寄り、酒店（食堂）でサイダーと
肉の饅頭を買ってくれました。私は
サイダーを飲むのは初めてでした。私
饅頭は熱いので父は、手拭いにくる
んで美美子に持たせましたが、美美子
は目を丸くして食べずにいつまでも
持っていたことを覚えていて、父
は特に美美子を可愛がっていて、夜
はだっこして寝ていました。ヒゲを
触るとザラザラして安心して眠っ

たそうです。
また父は、仔馬を大きく育て関東軍
に供出し、関東軍から褒美として、食
油、タバコ、角砂糖、酒等々をもらい、
それで父は満足していたようでした。
終戦一ヶ月前 父に召集令状
昭和二十年七月、父に召集令状が来
ました。「到頭来たか」と両親は肩を落
としていました。一年過ぎてても除隊し
なかつたら、また戦死したら子供達を
連れて内地に帰るように、農業日記や
国境警備報告書などを形見として用意
してありました。
戦争が激しくなり、スパイやゲリラ、

馬族がうろろしているの、父はそつと
七月二十二日に、百円札を三枚持つて出征
しました。母は泣いていました。
八月十日、ソ連兵が攻めてきた
昭和二十年八月十日、朝八時に「十分
の食糧を持つて本部に集合」の命令が出た。
九時には「一ヶ月分の食糧」と言われ、只
事ではないと感じた。母と私は地下室に蒲
団や着物、ランドセル等々を入れた。その
時は戦争に勝つて帰れると思いました。その
班長さんが大声で「急げ、十里後までソ
連軍の機械化部隊が攻めて来ている。早く
しろ、急げ」と騒ぎます。人殺しや強姦、
略奪、拉致、何でもありのソ連兵です。
人夫頭の王さんが六頭引きの馬車を仕立
ててくれました。米、味噌、それに反物を
馬車に積み、それに雄志ちゃん位牌と、
村田銃三丁も積みました。美美子は幼児の
平呂（ベロー）を馬車に乗せると泣きわめ
きました。そして

中でした。王さんが馬に乗って後
からついて来てくれたので心強か
った。
逃げ込んだ開拓団本部は
すでに蛇の殻（もぬけのから）
開拓団本部に着いたのが昼頃。
本部も守備隊も蛇（もぬけ）の殻
でした。日本兵が八路軍からわかれ
ない二人の兵隊がいて、十五歳以
上の男子は残された。私達仙南屯
の十二家族は老人と女子供四十名
は、班長さんを先頭に先に行つた
馬車の跡を西に進みました。一時
間位行つてから振り返ると、
本部守備隊や学校、神社、寄宿舎
に火柱が上がっていました。
「急げ急げ」十一歳の私は
三歳の妹を背負って逃げた
「急げ、急げ」と班長さんが怒
つて松花江の支流を何本も渡つた
夕方、大きな支流に阻まれ、馬車
を断念、王さんを帰すことにした。
「モーツォン（木村）ちゃんグイ
（旦那様）、タイタイ（奥様）、タ
ーテン（ありがとう）、サイチン
（さよなら）」と何度も礼を言つて
帰つていった。
母は家族皆んなの衾や裾に札（紙
幣）を縫い付けたり、雨カッパを
破いて札を包み、飯盒の味噌の中
に入れた。郵便貯金通帳や合作社
の定期証書は母が持った。村田銃
はここで捨て、母は食糧、着物、私
毛布などを背負った。十一歳の私
は三歳の妹の睦子をおんぶした。
（その①終わり・次号につづく）



- 《木村さん一家の満州国引き揚げ行路》**
- ①宮城開拓団として入植した「仙南屯」
 - ②露天掘りの鶴崗鉱山・鶴崗（ホーカン）」
 - ③逃避のため貨物列車に乗った「福龍駅」
 - ④引き揚げ船に乗った港「葫蘆島（コロトウ）」
 - ⑤引き揚げ船で日本に上陸した「佐世保」

私達は平呂家族と
王さん家族に見送
られて家を出まし
たが、平呂はいつ
までも手を振つて
いました。美美子
は「平呂、平呂」
といつまでも泣い
ていました。
母は妊娠八ヶ月
でしたので、王さ
んは「ヨーンズ（栄
子）が手綱を取れ」
と言う。全盲の馬
を真ん中に、両親
に二頭づつ繋ぎま
した。私は無我夢

○木村栄子さん宅は相馬市磯部で、3月11日の大震災と原発事故から関東に避難されていました。幸いお宅は磯部中学校付近の高台にあり、津波からは無事でした。事務局では原稿と貴重な写真、資料や地図などを1年近くも預かったままでしたが、ようやく編集して連絡をとりながら、「戦争体験37」として掲載することができました。